

総合型地域スポーツクラブのマーケティング戦略に関する基礎的研究

－既存会員の理解に向けたライフスタイル構造の把握－

A Fundamental study on marketing strategy in community-based sports clubs: Grasp of lifestyle structure for understanding of existing members

井澤悠樹*, 松永敬子**

Yuki IZAWA, Keiko MATSUNAGA

キーワード：総合型地域スポーツクラブ、ライフスタイル構造、マーケティング戦略

Key words: Community-based sports club, lifestyle structure, marketing strategy

要約

本研究の目的は、総合型地域スポーツクラブにおけるマーケティング戦略の立案に向けた基礎的研究として、クラブ会員のライフスタイル構造の把握を試みることである。

分析の結果、総合型クラブ会員のライフスタイル構造は、「自己実現」「健康」「休息」「気晴らし」「家族」「交流」の6因子構造であることが明らかとなった。また、クラブ会員のライフスタイル構造は多種多様な価値観で構成されており、複雑な構造であることも示唆された。一方で、今後、更なる検討の必要性が残された。具体的な検討課題として、1) サンプル特性の差異を考慮すること、2) 異なる総合型クラブ会員を1つの集団として理解することの再検討、が挙げられた。

The purpose of this study is to understand the club member's lifestyle structure, as a fundamental study for the planning of the marketing strategy in the community-based sports club. The result of the analysis showed that the club member's lifestyle structure was consisted of six factors: "Self-realization", "Health", "Rest", "relaxation", "Family", and "Friendship". Moreover, it was suggested that the club member's lifestyle structure be a complex structure itself is composed of various sense of values. On the other hand, the necessity of the still more examination was left. As a concrete assignment were, 1) The difference of the sample characteristic was consider, 2) Reexamination to different clubs' members are understood as a one group.

1 はじめに

1995年に始まった「総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）育成モデル事業」は、2000年に策定されたスポーツ振興基本計画において国を挙げた一大施策となった。当時のスポーツ振興基本計画に記された政策目標の1つである「地域におけるスポーツ環境の整備充実方策」の具体的施策として、総合型クラブの全国展開が明文化されている。当時、「2010年までに全国の各市区町村において少なくとも一つは総合型クラブを育成する」ことを目標に掲げており、14年が経過した現在、全国に3,512の総合型クラブ（創設準備中クラブも含む）が育成されている（文部科学省，2014）。また、2012年に策定されたスポーツ基本計画においても総合型クラブの育成について言及していることを考えれば、地域スポーツ振興に対して総合型クラブが果たす役割は、大きなものであると理解できよう。

しかし、総合型クラブの実情に目を向けると、決して満足なクラブ運営を行えているとは言い難い。文部科学省が行った過去2回の実態調査（2012; 2013）において、「会員の確保（増大）」、「財源の確保」、「指導者の確保（育成）」はクラブ運営課題の上位項目として挙げられており、特に「会員の確保（増大）」、「財源の確保」は、クラブ運営の根幹を揺るがす課題であると指摘できる。文部科学省が示す総合型クラブの基本コンセプトが「“受益者負担”によって、『多種目』『多世代』『多志向』の活動に参加することができる、地域住民の“自主的・主体的な運営”による組織」であることを考えれば、満足な会員の確保が行えていないということは、クラブ運営を行う為の財源を確保できていないことに直結する。この現状が、「自主財源率50%以下」の総合型クラブが過半数に上るという結果に繋がっている（文部科学省，2013）。

以上のことは、間野（2007）が指摘している「クラブ運営におけるマーケティングの不在」に起因するものであり、顧客概念の欠落と供給者の理論によってクラブ運営が行われていると考えられる。言うまでもなく、健全なクラブ運営を行う為には経営資源であるヒトやカネは不可欠であり、良いサービスを準備できていなければ顧客は集まらず、当然ながら収入を得ることはできない（松岡，2009）。特に、選択消費財としての意味合いが強いスポーツを取り扱うとなれば、「自分たちに何ができるのか？」ということよりも「何が求められているのか？」を把握し、ニーズに合致したスポーツサービスの提供は不可欠である。

そこで本研究では、ニーズを理解する為の一手段として、ライフスタイル構造の把握を試みる。ライフスタイルとは、特定の価値観や選好によって人々の集合を分類する概念であり、行動や嗜好を規定する変数であることから、消費者を捉える為の重要な視点の一つとされている（Lazer, 1963; 仁平, 2004）。また、スポーツを含めたレジャー行動においても、各々のライフスタイルを反映するとの報告（Perreault et al., 1977; Scott et al., 2005）がなされており、対象者のライフスタイルを把握することは、クラブ運営において有益なマーケティング資料となり得る。以上のことを踏まえ本研究では、総合型クラブのマーケティング戦略の立案に向けた基礎的研究

として、既存会員のライフスタイル構造の把握を試みることを目的とする。

2 研究方法

本研究では2回の質問紙調査を経て、総合型クラブ会員のライフスタイル構造の把握を試みる。1次調査ではライフスタイル測定項目の精選を行い、その結果を基に、2次調査において総合型クラブの既存会員に対して質問紙調査を実施し、ライフスタイル構造の把握を試みる。

(1) 分析方法：1次調査

ライフスタイル測定項目を精選するにあたり、本研究では、レジャーライフスタイル（以下、ライフスタイル）項目を設定した。ライフスタイルの測定をレジャーの側面に限定した理由として、1) これからの生活において最も力を入れてみたいと考えている場面を「レジャー・余暇生活」と回答する傾向にあること（内閣府，2012; レジャー白書，2013）、2) 総合型クラブで過ごす時間は、本来行うべき義務的行為（仕事や労働、就学など）から解放された、自身で自由に活用することのできる時間であることが理由である。また、ライフスタイル測定の方法論に関する問題点はいくつか指摘されているが（圓丸，2009; 清水，2006; 2008）、マーケティング活動におけるライフスタイルの有用性や、デモグラフィック要因よりも説明力が高いことが示されていることから（塩田，2006; 清水，2008）、特定のカテゴリーについて言及することで説明力が高くなるとされる、個別ライフスタイルの考え方にに基づき、レジャー場面に限定したライフスタイルの測定を試みる。

Dumazedier (1972) のレジャー概念に基づき、休息に関する項目を9項目（Yang et al., 2012; 川西・菊池，1990; レジャー白書，2012）、気晴らしに関する項目を16項目（Chen et al., 2009; 川西・菊池，1990; レジャー白書，2012）、個人的成長に関する項目を24項目（Yang et al., 2012; 川西・菊池・北村，1992; レジャー白書，2012）、計49項目を設定した。また、設定した49項目をWellsら（1971）のライフスタイルを構成するAIO基準に照らし合わせ、マーケティングの専門家1名にライフスタイル概念との相違がないかの確認を依頼し、助言を得た。結果として、構成概念との相違は認められないという結果であった。

設定した49項目の精選を目的として、大学生208名を対象に集合調査法による質問紙調査を行った。調査期間は2013年7月16日・22日・23日の3日間。個人特性項目のほか、ライフスタイル49項目に対して「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定尺度を設定して回答を求めた。性別・年齢・ライフスタイル項目を完答している者のみを採用した結果、有効標本数（率）は187部（89.9%）であった。分析には、統計分析ソフトSPSS Statistics22を用いた。

(2) 分析方法：2次調査

2次調査では、1次調査で得られたライフスタイル項目を用いて、2つの総合型クラブに所属する20歳以上の会員423名を対象に、宿題調査法による質問紙調査を行った。クラブマネージャー、もしくはクラブ代表者宛てに質問紙を郵送し、各プログラムにおいて総合型クラブ会員に質問紙を配布、回答を求めた。調査期間を1週間設けた後、各クラブにおいて回収、筆者への返送を求めた。調査期間は、Aクラブが2013年11月12日からの1週間、Bクラブが2014年1月15日からの1週間で行った。1次調査と同様に、性別・年齢・ライフスタイル項目を完答している者のみを採用した結果、有効標本数(率)は204部(48.2%)であった。分析には、統計分析ソフトSPSS Statistics22およびAmos ver.22を用いた。

3 結果

(1) 1次調査：対象者の特性

表1は、対象者の特性を示したものである。男女の割合はほぼ等しく、男性が49.7%、女性が50.3%であった。平均年齢は、対象者が大学生ということもあり19.6歳(S.D.:1.23)であった。現在の定期的な運動・スポーツの実施状況においては、半数以上の者が定期的実施者(週1日以上の実施)であり、余暇時間の活動においても、約半数の者が何らかの余暇活動を行っている結果であった。

表1 対象者の特性

性別	(N)	(%)
男性	93	49.7
女性	94	50.3
合計	187	100.0
平均年齢	19.6歳	±1.23
現在の定期的な運動・スポーツの実施状況	(N)	(%)
よくやる(週3日以上)	48	25.7
ときどきやる(週1日~2日程度)	49	26.2
あまりやらない(月に数回程度)	34	18.2
ほとんどやらない(年に数回程度)	35	18.7
全くやらない	21	11.2
合計	187	100.0
余暇に対する行動変容	(N)	(%)
余暇活動を行っている	78	44.1
最近(6ヶ月以内)やり始めた	16	9.0
行っていないが、近いうち(1ヶ月以内)には何か始めようと思っている	20	11.3
行っていないが、将来的(半年以内)には何か始めようとは思っている	32	18.1
行っておらず、これからも何かを始めようとは思っていない	31	17.5
合計	177	100.0
余暇活動の形態	(N)	(%)
個人的に実施	29	74.4
教室やクラブ等に参加して実施	10	25.6
合計	39	100.0

(2) 1次調査：レジャーライフスタイル測定項目の選定

次に、ライフスタイル測定項目の選定を目的に分析を行った。初めに、得点分布による歪みを解消する為、設定した49項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果とフロア効果の確認を行った。結果、8項目において天井効果が確認されたが、「余暇では、友人や知人との交流を楽しむ」「親友や気心の知れた人と過ごす時間が好きだ」「有意義な人間関係を持つことが好きだ」「人の絆や繋がりを大切に思う」の4項目は、ライフスタイル概念を測定する上で重要であると判断した為、続けて採用することとし、残りの4項目は以後の分析より除外した。次に、45項目を用いて

表2 レジャーライフスタイル構造

因子	項目	因子負荷量	I-T相関	Cronbach's α
気晴らし	余暇とは、心の安らぎを得ることだ	0.77	0.69	.78
	余暇とは、日常生活の開放感を味わうことだ	0.71	0.53	
	余暇において最も重要なことは、日々のストレスを和らげることだ	0.69	0.64	
	余暇では、ストレス軽減の促進と元気を取り戻すことに期待する	0.51	0.55	
	充実した余暇を過ごしている	0.45	0.42	
休息	余暇では、自分が満足できる活動でなければ、参加したくない	0.40	0.36	.82
	余暇は、家でんびりと過ごしたい	0.85	0.72	
	週末は、家に居ることを好む	0.74	0.72	
	仕事終わりや学校が終わった後は、家に居ることを好む	0.64	0.61	
	余暇をぼんやりと過ごすことが多い	0.57	0.56	
充実	自身の気晴らしの中心は、家の中にある	0.48	0.55	.80
	余暇とは、身体を休めることだ	0.42	0.36	
	自分の将来は、とても希望に満ち溢れている	0.77	0.69	
	毎日、新たな課題を発見し、楽しみでいっぱいである	0.71	0.52	
交流	自身の人生が有意義であることに自信がある	0.64	0.62	.83
	自分自身が成長し、変化していることを実感できる	0.59	0.60	
	余暇とは、仕事や学習への新たな意欲を得ることだ	0.51	0.46	
	余暇では、親友や気心の知れた人と過ごす時間が好きだ	0.81	0.72	
	余暇では、人の「絆」や「繋がり」を大切に思う	0.79	0.77	
スポーツ	余暇では、有意義な人間関係を持つことが好きだ	0.61	0.70	.80
	余暇では、他者や社会の為に何かをしたい	0.57	0.44	
	余暇では、友人や知人との交流を楽しむ	0.45	0.53	
	余暇では、スポーツをして過ごす	0.86	0.61	
	余暇では、体力づくりが心にかけている	0.82	0.70	
自己実現	余暇では、自分の年齢・体力に合った活動を行っている	0.62	0.59	.78
	余暇では、健康の保持・増進に心にかけている	0.56	0.59	
	規則正しい生活をしていると思っている	0.46	0.45	
家族	余暇では、実現可能で、現実的な目標を設定する	0.75	0.64	.71
	余暇では、目標の達成度に注意を払う	0.62	0.64	
	余暇は、家族と過ごしたい	0.67	0.55	
	余暇は、家族との交流を好む	0.66	0.55	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 8回の反復で回転が収束
 KMO=.81, Bartlett test = $\chi^2=2691.98$, d.f.=465, p<.001

因子相関行列

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子
第1因子	1						
第2因子	0.26	1					
第3因子	0.34	-0.08	1				
第4因子	0.54	0.05	0.36	1			
第5因子	0.14	-0.16	0.48	0.21	1		
第6因子	0.07	0.16	0.24	0.16	0.24	1	
第7因子	-0.03	0.16	-0.06	-0.05	-0.05	0.00	1

主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子負荷 .40 を基準として項目の取捨選択を行った結果、14項目が除外され、7因子31項目が抽出された。抽出された7因子構造におけるKMO (Kaiser Meyer Olkin のサンプリング適切性基準) は .81 を示し、因子分析の妥当性が確認された。最後に、抽出された各因子の信頼性を検証する為、クロンバックの α 係数を算出した結果、各因子とも .71 から .83 までの値を示し、信頼性が確認された (表2)。

第1因子は6項目で構成されており、ストレスの軽減や解消、開放感などに関する項目で構成されていることから、「気晴らし因子」と命名した。第2因子も6項目で構成されており、この因子では、余暇を家で過ごすことに関する項目で構成されていることから「休息因子」と命名した。第3因子は5項目で構成されており、自身の成長に対する評価や、日々への充実感に関する項目で構成されていることから「充実因子」と命名した。第4因子は5項目で構成されており、余暇を他者と過ごすことに意義を感じているとする項目で構成されていることから、「交流因子」と命名した。第5因子は5項目で構成されており、健康づくりやスポーツ活動に関する項目で構成されていることから「スポーツ因子」と命名した。第6因子は2項目で構成されており、生活の中で設ける個人目標に関する項目で構成されていることから「自己実現因子」と命名した。最後に第7因子は、家族に関する2項目で構成されていることから「家族因子」と命名した。

(3) 2次調査：対象者の特性

表3は、2次調査の対象者となった総合型クラブ会員の特性を示したものである。性別では女性の方が多く、特に60歳代、40歳代の会員が多い。9割以上の者が既婚者であり、職業では「主

表3 対象者の特性

性別	(N)	(%)	職業	(N)	(%)
男性	60	29.4	会社員・団体職員	24	11.9
女性	144	70.6	公務員	3	1.5
合計	204	100.0	自営業	5	2.5
年代	(N)	(%)	アルバイト・パートタイム	41	20.3
20歳代	4	2.0	学生	2	1.0
30歳代	31	15.8	主婦・主夫	86	42.6
40歳代	56	28.6	無職	41	20.3
50歳代	22	11.2	合計	202	100.0
60歳代	58	29.6	運動習慣	(N)	(%)
70歳以上	25	12.8	週3日以上	70	34.3
合計	196	100.0	週1日～2日程度	104	51.0
平均年齢	53.5歳	±13.6	月1日～2日程度	7	3.4
婚姻	(N)	(%)	年に数回程度	19	9.3
未婚	14	7.0	全くやらない	4	2.0
既婚	186	93.0	合計	204	100.0
合計	200	100.0			
子どもの有無	(N)	(%)			
いない	5	2.7			
いる	178	97.3			
合計	183	100.0			

婦・主夫」と回答した者が最も多く 42.6%であった。現在の運動・スポーツ活動習慣は 85%以上の者が定期的実施者（週 1 回以上の実施）である反面、1 割ほどの者はほぼ実施していないという現状が見られた。これらのことは、総合型クラブ会員であったとしても運動・スポーツ系のプログラムではなく、手芸や絵画など、文化活動系のプログラムに参加している会員も回答していることが影響していると考えられる。

(4) 2 次調査：総合型クラブ会員のレジャーライフスタイル構造

1 次調査で採用された 31 項目を用いて、総合型クラブ会員のライフスタイル構造の把握を試みる。初めに、1 次調査で採用された 31 項目を用いて、再度、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子負荷量 .40 を基準として項目の取捨選択を行った結果、7 項目が除外され、6 因子 24 項目が採用された。抽出された 6 因子構造における KMO は .82 を示し、因子分析の妥当性が確認された。次に、採用された 6 因子 24 項目の構成が弁別力を備えているのかを確認する為、Item-Total（項目 - 全体）相関分析を行った。結果、本来属する因子よりも他の因子に対して有意に高い相関を示す項目は認められなかった為、24 項目を採用した。続けて、採用された 6 因子構造が、より単純構造であるのかを確認すること、併せて、測定尺度カテゴリーの構成概念妥当性を検証する為に確認的因子分析を行い、収束的妥当性および弁別妥当性の検証を行った。収束的妥当性は、確認的因子分析および平均分散抽出（Average Variance Extracted：以下、AVE）を算出して検証を行った。弁別妥当性は、因子間相関の平方と AVE を比較することで検討を行った。最後に、各因子の内的整合性を確認する為に Cronbach の α 係数を、構成概念信頼性を確認する為に CR（Composite reliability）を算出した。

結果、24 項目から各因子へと示されるパス係数において、Fornell and Larker (1981) が項目の採用基準とする .71 に満たない項目が見られた為、構成概念との関係を考慮し、パス係数が最も低かった 3 項目を除外した。採用された 21 項目の確認的因子分析におけるモデル適合度は、 $\chi^2/df = 1.88$ 、GFI = .87、AGFI = .82、CFI = .89、RMSEA = .07、AIC = 441.61 であった。RMSEA（基準値 $\leq .08$ ）以外では、それぞれの基準値（ $\chi^2/df: 2.00 \leq$ 基準値 ≤ 3.00 、GFI・AGFI・CFI: $\geq .90$ ）を満たす結果は得られず、確認的因子モデルのモデル適合度が不十分であった。本研究では、総合型クラブ会員のライフスタイル構造を把握することに目的を設定していることから、24 項目での因子構造に捉われることなく、より詳細なライフスタイル構造の把握を目指し、基準値に満たない項目の削除を行った。その際、各因子の構成概念を十分に考慮した上で項目の取捨選択を行い、ライフスタイル構造の単純化を目指した。

各因子の構成概念を考慮した上で、パス係数の値が基準値に満たない項目のうち、最も低い値を示している項目から順に削除し、モデル適合度の改善に努めた。結果、11 項目が除外され、モデル適合度は、 $\chi^2/df = 2.35$ 、GFI = .92、AGFI = .86、CFI = .92、RMSEA = .08、AIC =

199.43と改善された。複数のモデルを比較検討する際、モデルの相対的な良さを評価する指標であるAICの値が最も低いモデルを選択する(小塩, 2012)との指摘があることから、13項目での確認的因子モデルを採用することとした。AGFIにおいて基準値を満たさなかったが、他の項目において基準値を満たしていることから、13項目での確認的因子モデルは一定の妥当性が示唆された(表4)。

次に、収束的妥当性を確認する為、AVEを算出した。結果、「休息因子」、「気晴らし因子」の2因子においてFornell and Larker (1981)が基準値とする.50に満たず、十分な収束的妥当性を支持するには至らなかった。続けて、尺度の弁別的妥当性の検証を行った。結果、全6因子において、因子間相関の平方がAVEよりも高い値を示すものは見られなかったことから、弁別的妥当性が支持される結果であった(表5)。

続けて、各因子の内的整合性を検証する為に、Cronbachの α 係数を算出した。結果、「自己実現因子」は.79、「健康因子」は.74、「休息因子」は

表4 確認的因子分析のモデル適合度

項目数	21	→	13
CMIN/df	1.88	→	2.35
GFI	.87	→	.92
AGFI	.82	→	.86
CFI	.89	→	.92
RMSEA	.07	→	.08
AIC	441.61	→	199.43

CMIN/df: 2.00 ≤ 基準値 ≤ 3.00
GFI, AGFI, CFI: 基準値 ≥ .90
RMSEA: 基準値 ≤ .08 AIC: 基準値 = 最小値

表5 因子間相関係数の平方とAVEの比較

	自己実現	健康	休息	気晴らし	家族	交流
自己実現	.56a					
健康	0.51	.60b				
休息	0.02	0.07	.46c			
気晴らし	0.37	0.30	0.02	.40d		
家族	0.03	0.00	0.23	0.10	.65e	
交流	0.24	0.10	0.07	0.20	0.02	.60f

a~fの値は、各因子のAVEを示す。

表6 クラブ会員のライフスタイル構造

因子	項目	因子負荷	AVE	α	CR
自己実現	毎日、新たな課題を発見し、楽しみでいっぱいである	0.76	.56	.79	.79
	余暇では、自分の決めた目標の達成度に注意を払う	0.74			
	自分自身が成長し、変化していることを実感できる	0.74			
健康	余暇では、体力づくりに心がけている	0.79	.60	.74	.75
	余暇では、健康の保持・増進に心がけている	0.76			
休息	余暇は家でんびりと過ごしたい	0.64	.46	.63	.67
	仕事終わりや学校が終わった後は、家に居ることを好む	0.72			
気晴らし	余暇とは、日常生活の開放感を味わうことだ	0.64	.40	.58	.57
	余暇では、ストレス軽減の促進と元気を取り戻すことに期待する	0.63			
家族	余暇では、家族との交流を好む	0.88	.65	.78	.79
	余暇は家族と過ごしたい	0.73			
交流	余暇では、親友や気心の知れた人と過ごす時間が好きだ	0.65	.60	.72	.74
	余暇では、友人や知人との交流を楽しむ	0.88			

因子負荷: 基準値 ≥ .71 AVE: 基準値 ≥ .50 α : 基準値 > .50 CR: 基準値 > .60

.63、「気晴らし因子」は .58、「家族因子」は .78、「交流因子」は .72 を示した。最後に、構成概念の信頼性を検討する為に CR を算出した結果、「気晴らし因子」において許容値とされる .60 (Bagozzi et al., 1988) を上回らなかった。CR において基準値を満たさなかった「気晴らし因子」は、 α 係数においても低い値を示した。しかし、信頼性係数において明確な基準が存在するわけではないとした上で、小塩 (2005) が尺度を再検討する目安としている .50 を上回っていることから、一定の信頼性が示唆されたと判断した (表 6)。

以上の結果から、総合型クラブ会員のライフスタイル構造は、収束的妥当性の一部に課題が残る形となったが、6 因子 13 項目の構造であることが明らかとなった。

4 考察

本研究は、総合型クラブ会員のライフスタイル構造を把握することを目的に分析を進めてきた。1 次調査で採用されたライフスタイル項目を用い、既存会員のライフスタイル構造の把握を試みた結果、6 因子 13 項目が採用され、一定の妥当性と信頼性は示唆された。しかしながら、十分な結果であるとは断言できない結果でもあり、この結果については、下記の課題が挙げられる。

1 点目に、調査対象者の差異に起因するものと考えられる。本来、総合型クラブ会員のライフスタイル構造の把握を試みる為には、1 次調査におけるライフスタイル項目の選定も、総合型クラブ会員を対象として実施することが望ましい。しかしながら、本研究における対象者は、1 次調査では大学生、2 次調査で本来の研究対象である総合型クラブ会員を設定した。これは村上 (2007) も指摘しているように、「予備調査を行う際、本調査の母集団を代表するサンプルが望ましい反面、実際的には多くの場合が困難な為、現実的に調査が可能な大学生をサンプルとして用いることが多々として生じることがある」ことによるものである。本来ライフスタイルとは、価値観や生きがいなどを含んだ集団現象である一方で、社会学の変数によって変異するものとされている (Feldman et al., 1975)。これらのことを考えれば、平均年齢 19.6 歳の大学生と平均年齢 53.5 歳の総合型クラブ会員とでは、ライフスタイル構造は同質ではなく、異なるライフスタイル構造を有していることも予想される。このことは、大学生を対象とした 1 次調査において、余暇に行うアクティビティがスポーツ活動や自分の年齢にあった活動も含めた「スポーツ因子」であったものが、総合型クラブ会員を対象とした 2 次調査では、健康づくりや体力づくりに関する項目のみでの構成となった「健康因子」へ変化した点からも伺える。

つまり、今回の結果で得られたライフスタイル構造は、あくまでも対象となった 2 クラブに所属する会員のライフスタイル構造であるとも理解でき、一概に総合型クラブに所属する会員のライフスタイルを反映しているとは言いきれない。これらのことから、今後さらに研究を深めていく上では、調査対象者の差異を可能な限り少なくできるようなサンプルの選定を行う必要があるだろう。

2点目に、異なる総合型クラブの会員を1つの集団として捉えることへの課題である。総合型クラブの基本コンセプトの1つには「多志向性」が掲げられている。これは、競技志向・遊戯志向・健康志向など、様々な志向性を持つ者が、分け隔てなく同様にスポーツを楽しみ、スポーツに親しむ場が総合型クラブであることを示している。つまり、クラブ内の会員間でも志向性が多様であることに加え、各クラブもまた、それぞれの理念を掲げて活動を展開しているのである。このことを考えれば、価値観や生きがいなどを含んだ集団現象として理解できるライフスタイルの構造は、クラブ間で異なることも考えられ、かつ、非常に複雑なものになることが予想される。この課題については、本研究で得られたライフスタイル項目を用いて、異なる総合型クラブの会員を対象に再現性を確認する必要がある、今後の研究課題であろう。

5 結論

本研究は、総合型地域スポーツクラブにおけるマーケティング戦略の立案に向けた基礎的研究として、総合型クラブ会員のレジャーライフスタイル構造を把握することを目的とした。結果、総合型クラブ会員のレジャーライフスタイル構造は、「自己実現」「健康」「休息」「気晴らし」「家族」「交流」の6因子が抽出され、一定の妥当性と信頼性も確認された。一方で、いくつかの研究課題が残されたことも踏まえ、総合型クラブ会員のレジャーライフスタイル構造への理解を深める為には、今後、更なる研究結果の蓄積が必要であろう。この点は考察でも述べたとおり、調査手続き、および方法論についても検討していく必要性がある。

しかしながら、本結果が全くの意味を成さないという訳ではなく、本研究の対象となった2クラブにおいて活用でき得る結果である。今後のクラブ運営を展開する上で、既存会員は単にスポーツ活動を行うことを目的として総合型クラブの活動に参加しているわけではなく、一方で、ゆっくりと過ごすことも余暇の価値として持っているということが理解でき、今まで以上に充実したクラブライフを過ごしてもらう為の基礎資料となり得る。

今後は、本研究で残された課題に取り組むと同時に、総合型クラブのマネジメントに寄与でき得る研究を重ねていきたい。

付記

本研究は、平成25年度笹川スポーツ研究助成によって実施され、日本スポーツ産業学会第23回大会において研究発表した内容を、加筆修正したものである。

引用文献

- Bagozzi, R. P. and Yi, Y., 1988. On the evaluation of structural equation models. *Journal of the Academy of Marketing Science* 16, pp74-94.
- Chen, J.S., Huang, Y.C. and Cheng, J.S., 2009. Vacation lifestyle and travel behaviors. *Journal of Travel & Tourism Marketing* Vol. 26, pp494-506.
- Dumazedier, J., 1972. I. 余暇と社会 In: 余暇文明へ向かって, 中島巖訳, 株式会社東京創元社, pp17-19.
- Feldman.S.D. and Thielbar.G.W., 1975. *Lifestyles: diversity in American Society*, Little. Brown and Company: Boston, pp1-4.
- Fornell, C., and Larcker, D. F., 1981. Evaluating structural models with unobservable variables and measurement error. *Journal of Marketing Research* 18, pp39-50.
- 圓丸哲麻, 2009. マーケティングにおけるライフスタイル概念の再考, 関西学院商学研究 Vol.60, pp35-52.
- 川西正志, 菊池秀夫, 1990. 成人男性のパケーション・ライフスタイルに関する研究 - 世代別とレジャー活動タイプ別の特性 -. *Leisure & Recreation (自由時間研究)* Vol. 7, pp11-24.
- 川西正志, 菊池秀夫, 北村尚浩, 1992. 人男性のレジャー・ライフスタイル, 鹿屋体育大学学術研究紀要第7号, pp9-19.
- 公益財団法人日本生産性本部, 2012. レジャー白書 2012, 生産性出版.
- 公益財団法人日本生産性本部, 2013. レジャー白書 2013, 生産性出版.
- 小塩真司, 2005. 第7章因子分析を使いこなす - 尺度作成と信頼性の検討 - In: 小塩真司著, SPSS と Amos による心理・調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで, 東京図書株式会社, pp128-158.
- 小塩真司, 2012. 第7章 Exel + Amos 活用マニュアル - 見やすい表の作成とパス図作成の為の総覧 - In: 小塩真司著, 第2版研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析, 東京図書株式会社, pp265-268.
- Lazer, W., 1963. *Life Style Concepts and Marketing, Toward Scientific Marketing*, Stephan Greysner, ed. pp140-151.
- 間野義之, 2007. 第12章総合型地域スポーツクラブと公共スポーツ施設 In: 間野義之著, 公共スポーツ施設のマネジメント, 株式会社体育施設出版, pp138-154.
- 松岡宏高, 2009. 第3章総合型クラブのマネジメントと企業経営の共通点 In: 黒須充編著, 総合型地域スポーツクラブの時代3 - 企業とクラブとの協働 -, 有限会社創文企画, pp40-51.
- 文部科学省, 2012. 平成24年度総合型地域スポーツクラブに関する実態調査. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/index.htm (平成26年10月1日 閲覧)
- 文部科学省, 2013. 平成25年度総合型地域スポーツクラブに関する実態調査. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/index.htm (平成26年10月1日 閲覧)
- 文部科学省, 2014. 平成26年度総合型地域スポーツクラブ育成状況調査. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/1352356.htm (平成26年10月1日 閲覧)
- 村上宣寛, 2007. 第5章尺度開発法 In: 村上宣寛著, 心理尺度のつくり方, 株式会社北大路書房, p68.
- 仁平京子, 2004. ライフスタイル概念における社会的・心理学的特質とマーケティング的特質, 商学研究

- 論集第22号, pp409-427.
- 内閣府, 2012. 第1章ライフスタイル・余暇に関するデータ・調査「国民生活に関する世論調査」 In: 佐藤公彦編, 余暇・レジャー&観光総合統計2014-2015, 株式会社三冬社, pp37-41.
- Perreault, D.W., Darden, D.K. & Darden, W.R., 1977. A psychographic classification of vacation life styles, *Journal of leisure research* Vol. 9, pp208-224.
- Scott, N. & Parfitt, N., 2005. Lifestyle segmentation in tourism and leisure: Imposing order or finding it?, *Journal of quality assurance in hospitality & tourism* Vol. 5, pp121-139.
- 清水聰, 2006. 第1章消費者の意思決定プロセスとコミュニケーション In: 田中洋, 清水聰編著, 消費者・コミュニケーション戦略, 株式会社有斐閣, pp20-23.
- 清水聰, 2008. 消費者のライフスタイルを用いたブランド評価, *流通情報* Vol.467 (5), pp10-20.
- 塩田静雄, 2006. 第11章マーケット・セグメンテーションの方法と分析 In: 塩田静雄著, マーケティング調査と分析, 株式会社税務経理協会, pp145-148.
- Wells, W.D. & Tigert, D.J., 1971. 'Activities, Interests, and Opinions', *Journal of Advertising Research* Vol. 11(4), pp27-35.
- Yang, M.C., Cheng, J.S. & Yu, S.W., 2012. Leisure lifestyle and Health-Related Quality of Life of Taiwanese adults, *Social Behavior and Personality* Vol. 40 (2), pp301-318.